

夕暮れの靖国通りに、三人の少年が立っていた。向かって右端がジーンズの上下を素肌に着け、中央が七分袖のTシャツに黒のショートパンツ、左端は裾を落としたトレーナーにコットンパンツをはき、長く束ねた髪をキャップの後ろから垂らしている。

三人とも銀製のネックレスや指輪をたっぷりと身に着けていて、通りの向かいから見つめている鮫島の耳にも、ジャラジャラと音が聞こえてきそう。

年齢が十八より上ということはありえないだろう、と鮫島は思った。

いきがっているようにも、つっぱっているようにも、見えない。退屈しているわけではなく、しかし興奮してもいない。

そこにいることをごくあたり前の、日常の生活の一カットとしてうけいれている。

交差点を渡って自分たちのほうへおしよせてくる人波にときおり目を向けているが、その視線に緊張はない。

人を待っているようにも見えないし、単に暇つぶしをしているようでもある。

ジーンズがジャケットから煙草の箱をとりだすと、手慣れた仕事で一本ふりだし、くわえた。

ラッキー・ストライクだった。

ジッポーのライターのヤスリを太腿でこすって着火し穂先にもつていく。

三人とも、小刻みに体を揺らしている。

踊っているのだった。ヘッドホンステレオをつけているわけではない。ゲームセンターの騒音を除けば、どこからも音楽は流れてこない。しかし、踊っているのだった。

彼らにしか聞こえない、彼らだけの音楽で踊っているのだ。

三人とも、視線をばらばらにとぼしていた。

三人はチームだった。よくできたチームだ。三六〇度全方位をカバーしあっている。

歩行者用の信号が赤になり、車が流れだした。三人の姿が車のかげになる。

鮫島は畳んだ新聞をわきにはさんだ。

薬屋の角を抜けてきた、ミニスカートのワンピースを着たふたり組の少女が信号で立ち止まった。

ひとりは脱色した髪をソバージュにして垂らしている。もうひとりは刈りあげに近いくらい、短くカットしていた。ふたりともよく陽にやけ、過ぎたばかりの夏の名残りを素肌にあたりとどめていた。白いソックスを足首の位置でたるませ、スポーツシューズをはいている。

歩行者用の信号が青になった。ふたりは歩きだした。まっすぐに横断歩道を渡っていく。十六歳、と鮫島は見当をつけた。

煙草をとりだし、火をつけた。

ふたりの少女は、三人組に近づいていった。歩道にあがる。刈りあげの娘が右の拳をさっ

とつきだした。長髪の少年が左の掌でばつとうけとめた。向かい合ったふたりは、無言のまま、残るほうの掌を上下から打ち合わせた。

そこで再び車の流れが動きだした。

ひとかたまりになった五人は、近くのゲームセンターに向かつて歩きはじめる。

鮫島は、地下道の入口の階段をゆつくりとおりた。三人組の全方位カバーから逃れられるままで、急ぐことはしなかった。

階段の壁が視線をさえぎるまで下におりると、猛然と走りだした。地下道をまっすぐつつきり、二段おきに階段を駆けあがる。

ゲームセンターの前で地上にでた。入口のクレインゲームにソバージュの娘とショートパンツ、長髪の三人がとりついていて。ショートパンツと長髪はあいかわらず全方位カバーをつけている。

駆けあがった鮫島の顔をショートパンツが見つめた。赤茶色をしたさらさらの髪を額の中央で分けている。頬にニキビの跡が残っていた。

無表情にその視線がそらされた。ゆつくりと体の向きを変え、鮫島に見えない顔の位置で何かをいった。

長髪の背がこわばる。

まただ、と鮫島は思った。自分の写真が流れているのか、それともこいつら十代の連中には、お巡りを一瞬で見抜く超能力が備わっているのか。

やくざたち、大人の犯罪者が絶対に見抜けない、鮫島の正体を、この連中は一発で見破る。

通りの向かいにいたのは、だからだった。一〇メートル以内に近づくと、この連中は、さも悪臭を放つ汚物がそこに現われたかのように、ばらばらになって歩き去るのだ。

鮫島に横顔を向けていたショートパンツがぐるりと向きなおった。長髪は、ゲームセンターの奥の暗い一角に入りこもうとしていた。

鮫島はまっすぐにそちらへ向かった。

「まあまあまあ」

ショートパンツが立ち塞がるように踏みだしてきた。唇に、にやけたような薄い笑いをはりつけている。

「どけ」

「まあ、そういわないで」

鮫島はショートパンツの肩に手をかけた。

「おっと」

その手を見つめ、わざとらしく鮫島を見あげる。鮫島はいった。

「いくつだ、お前」

「十七ざんす」

ショートパンツはおどけたようにいった。ソバージュの娘はいちはやく姿を消していた。

「成人式、刑務所で迎えたいか」

「冗談きついでざんす」

「だったらどけ」

唇をすぼめ、肩をすくめた。鮫島はその体をおしのけ、ゲームセンターの内部に入った。まっすぐ奥に向かう。

ゲームセンターの中には、時間帯もあって十代の若者がいっぱいだった。週に二度以上、同じ防犯課の少年係が狩り、こみをかましている。が、この時間帯だと、喫煙以外では何の点もあがらない。

三分の一は、学校の制服を着ていた。

長髪と刈りあげが、もつとも奥の、コイン販売機の前にいた。長髪が壁についた手に、よりかかるようにして、刈りあげが体をくねらせている。

ジーンズの姿がない。

このゲームセンターの造りはよく知っている。右奥の競馬マシンのわきに、細いドアがあり、ビルの裏口へと通じているのだ。

鮫島はすつとそちらに向かった。長髪が壁から手を離し、同じ方向をめざした。

ドアにたどりついたのは、長髪のほうが一歩早かった。鮫島と向き合うようにしてもたれかかり、ショートパンツとまったく同じような薄笑いを浮かべた。左手をコットンパンツのポケットにさしこんでいる。

「やっほう」

今度は鮫島は容赦しなかった。右手で襟首えりくびを引き、左手で相手の右肩をおしながら、足払いをかけた。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。